ZOCALO 2019 12▸2020 1

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

森田恒友展　自然と共に生きて行かう

2020年2月1日（土）～3月22日（日）

1915年にパリのリュクサンブール公園で撮影された写真があります。左端に写っているのが34歳になる森田恒友。洋画家として勉強するため、前年にパリに渡りました。一緒に写っているのは、恒友の左から、高村眞夫、正宗得三郎、山本鼎、足立源一郎。パリの同じアパートに暮らす画家仲間と撮影した貴重な一枚です。

パリにて　1915年

森田恒友（1881－1933）は埼玉県熊谷市に生まれ、20歳で画家を志して上京しました。小山正太郎の不同舎や、東京美術学校西洋画科で洋画を学び、卒業後は雑誌や新聞に挿絵や漫画を描く仕事をしながら、石井柏亭、山本鼎と美術文芸雑誌『方寸』の創刊に携わります。

1914年6月に念願のパリに渡りますが、翌月に第一次世界大戦が勃発。不安を抱えてヨーロッパ各地を転々とするなか、11月に南仏を訪れ、セザンヌの故郷エクス＝アン＝プロヴァンスに滞在したことは、恒友にとって貴重な体験になりました。恒友は、セザンヌが故郷の自然と向き合い、徹底した仕事を残したことに思いを馳せ、セザンヌの造形表現を追究すべく、制作に励みます。《プロヴァンス風景》では、前景に大きく描かれた樹木や、後景との対比によって生まれる空間の広がりに、ゼザンヌの画面構成の影響をみることができるでしょう。一方、フランスで強く惹かれたもうひとりの美術家は、風刺画家のドーミエでした。的確な描写力で、鋭くもユーモアのある視点から市井の人々を描き出したドーミエに、自らの関心との共通点を見出したのです。

《プロヴァンス風景》1914年　熊谷市立熊谷図書館蔵

翌15年に帰国して、しばらくは洋画を中心に発表しますが、やがて国内各地を旅するうちに、日本の風景や湿潤な気候に水墨表現が適していることに気がつきます。次第に制作の主軸を日本画へと移し、洋画の制作は減っていきました。晩年に手がけた水墨画の《四季田園和楽》（四幅対）では、四季折々の平野の自然と人々の長閑な生活が、ユーモアを交えて描き出されています。

こうした帰国後の作風の展開は、一見すると唐突に思われますが、恒友は完全に日本画家へと転向したわけではなく、晩年まで洋画と日本画の両方を手がけていました。そして、作風は大きく変転しても、その制作態度は一貫していたといえるでしょう。《四季田園和楽》にみられる、自然を静かに見つめる眼差しを、恒友はヨーロッパでセザンヌに惹かれた頃から、持ち続けていました。渡欧前にジャーナリズムの仕事によって深めた市井の人々への関心は、ドーミエに対する共鳴へ、さらに人々の素朴な暮らしを描いた《四季田園和楽》へと繋がっています。

そして、恒友の制作を生涯にわたって根底から支えたのは、初期の不同舎時代に培われた、空間や対象を正確にとらえるデッサン力でした。《四季田園和楽》は水墨で描かれていますが、奥行きのある空間構成や、対象の三次元的な捉え方に、洋画の学習によって身に付けた描写力を垣間見ることができます。恒友にとって洋画と日本画の区別は、重要ではありませんでした。ただ描きたい自然があり、そこに暮らす人々がいて、それらをより的確に描くために、洋画と日本画の間を自由に行き来していたのではないでしょうか。

日本画を制作する恒友

「森田恒友展」では、洋画と日本画の主要作品、および雑誌やスケッチブック、書簡、装幀本等の資料によって、その魅力に迫ります。この展覧会が恒友の画業に新たな光を当てる機会となることを願っています。（T.Y.）

《四季田園和楽》より「月夜」1928年　個人蔵

森田恒友　略年譜

1881（明治14）年　0歳
埼玉県大里郡玉井村（現・熊谷市）に生まれる。

1901（明治34）年　20歳
画家を志して上京し、中村不折に師事するが、不折がすぐに渡欧したため、小山正太郎の画塾・不同舎に入学する。

1902（明治35）年　21歳
東京美術学校（現・東京藝術大学）西洋画科選科に入学。

1904年（明治37）年　23歳
青木繁、坂本繁二郎、福田たねと房州布良に旅行。この頃、青木繁から影響を受ける。

1907年（明治40）年　26歳
石井柏亭、山本鼎と美術文芸雑誌『方寸』を創刊。第一回文展に《湖畔》が入選。

1910（明治43）年　29歳
川越出身の清水ふみと結婚。

1911（明治44）年　30歳
大阪に転居し、帝国新聞、大阪毎日新聞に挿絵や漫画を描く（翌年12月まで）。

1914（大正3）年　33歳
パリに渡るが、第一次世界大戦が勃発し、各地を転々とする。セザンヌの故郷エクス＝アン＝プロヴァンスを訪れる。年末にパリに戻る。

1915（大正4）年　34歳
春にヴェトゥイユ、夏にブルターニュに滞在する。イタリア、スペインを旅行。帰国途中にリヨン美術館でドーミエの作品を模写する。帰国し、現在の渋谷区代々木に居を構える。

1916（大正5）年　35歳
平福百穂、小川芋銭らを中心とした日本画団体・珊瑚会に入会。天草や会津に旅行し、会津の支援者・田代与三久との交流が始まる。再興院展洋画部の同人となる。

1920（大正9）年　39歳
院展洋画部を脱退。『ホトトギス』の同人で丹波に住む西山泊雲との交流が始まる。

1922（大正11）年　41歳
小杉未醒、山本鼎、倉田白羊、梅原龍三郎らと春陽会を結成。現在の中野区に転居。

1928（昭和3）年　47歳
第6回春陽会展に《四季田園和楽》を出品。

1929（昭和4）年　48歳
帝国美術学校（現・武蔵野美術大学、多摩美術大学）の創立にあたり、西洋画科長となる。

1932（昭和7）年　51歳
国立公園協会の依頼で尾瀬沼を写生し、国立公園洋画展覧会に《雪解季の尾瀬沼》を出品。

1933（昭和8）年　52歳
千葉医科大学付属病院で死去。

MOMASコレクション第3期　ゆれるかげ

2019年10月26日（土）～2020年2月2日（日）

MOMASコレクション第3期「ゆれるかげ」では、わたしたち人間が外界へと向けるまなざしをテーマに作品を紹介します。ここでは出品作品のなかから2つの作品をとりあげたいと思います。

まずはマクロな視点から、この世界をとらえてみましょう。わたしたち人間の棲む地球が誕生したのは、今から46億年前のこと。太古の時代から現在にいたるまで太陽は地球上のあらゆる生命を育んできました。この太陽と地球との距離は約1億5千万kmで、地球が太陽の周りを1回転するごとにわたしたちは1年歳を重ねます。

野村仁（1945－）の《太陽7月》は、太陽系という果てしないスケールのなかにわたしたちが存在していることを思い起こさせてくれます。本作は太陽の1日の軌跡をピンホールカメラで撮影したもので、左が日の出から正午まで、右が正午から日没までをとらえています。今これを書いているわたしも、これを読んでいるあなたも、太陽のまわりで公転と自転を繰り返す地球に乗った小さな生命体に過ぎないのだ、と写真を見ながら考えてみると、せわしない日常のディテールがふっと後景に退くような感覚を覚えます。

今度は、地面に視線を落としてみましょう。

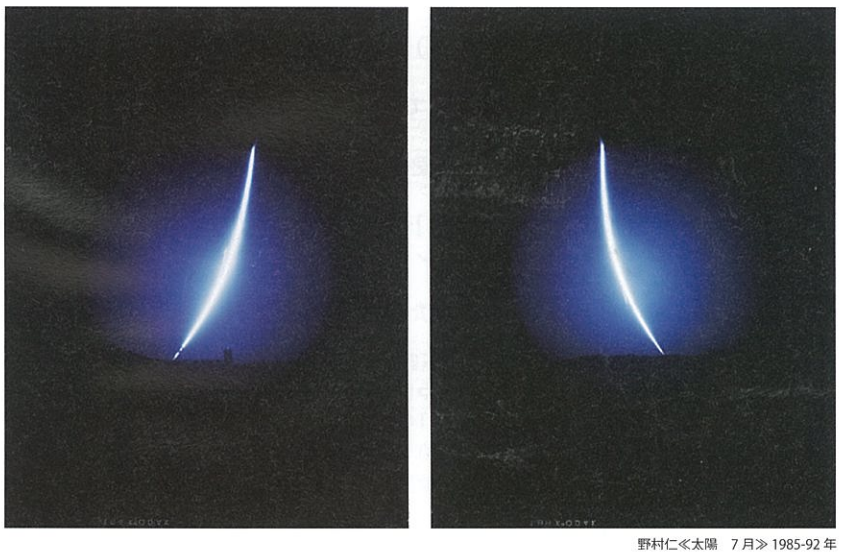
ある夏の日、暑くて樹の中に潜り込んで行くと、足元に木々が揺れていて、そこに揺れる影に気づかせてくれました。

（秋岡美帆「楠との出会い」『プレイバック・アーティスト・トーク』東京国立近代美術館、2013年、p.7）

秋岡美帆《ゆれるかげ》1991年

本企画のタイトルにもなっている秋岡美帆（1952－2018）の《ゆれるかげ》は、1980年代後半から秋岡が取り組んだシリーズ「ゆれるかげ」のなかの1点です。秋岡は風でゆれる木々の動きそのものに自らをゆだね、カメラを構える身体を揺らしながら地面をスローシャッターで撮影しています。その後、スキャンした画像データをNECO（＝New Enlarging Color Operation コンピュータ制御されたエアブラシによる拡大作画装置）という技法で、縦155cm、横215cmの麻紙に定着させています。大画面を前にすると、地面に映った光と影がゆれうごく映像のようなイメージに没入することができます。

外界をまなざす、という行為は必ずしもそこにある風景や動植物を見ることに留まりません。わたしたちは外界を介して自らの存在を認識したり、内なる身体感覚を呼び覚ましたりすることもあるのです。本企画では、当館の日本近現代美術コレクションから14点を選りすぐって紹介します。前期展示（10/26～12/8）では小村雪岱（1887－1940）の肉筆画も出品いたします。どうぞお見逃しなく。（S.S.）


野村仁《太陽　7月》1985-92年